

令和 5 年 2 月 日

教 育 長 様

研究コース
A グループ研究A
校園コード (代表者校園の市費コード)
751732
選定番号
150

代表者	校 園 名 :	大阪市立長原小学校
	校園長名 :	市場 達朗
	電 話 :	06-6708-0105
	事務職員名 :	石澤 綾子
申請者	校 園 名 :	大阪市立長原小学校
	職 名・名前 :	主務教諭 相井 夕子
	電 話 :	06-6708-0105

令和4年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和4年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	新規研究 (1年目)
2	研究テーマ	人権教育としてのインクルーシブ教育のあり方 — 誰一人取り残さず、みんながいきいきするために —			
3	研究目的	○人権のための教育「人権を大切に社会や個人を育てることを目的とする教育」のため ○人権としての教育「教育を受けることそのものが子どもの人権・育つ権利の保障」のため ○人権を通じての教育「日々の学校生活が人権を大切に作る雰囲気の中で営まれ 教育の方法や内容が「人権を大切に作る」という考え方と合致する教育」のため ○人権についての教育「人権のことを直接の内容とした教育」のため ○先進的研究校への視察を企画・実施しともに学ぶことで、大阪市全体へ発信 ○先進的研究校から講師招聘した講演会を企画・運営し、大阪市全体へ拡大 ○各種研修会を開催し、研修内容を実践に取り入れることで教員の資質向上を図るため			
4	取り組んだ 研究内容	いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSコシッパ 9.5ポイント) 算数科の授業研究における「入り込み支援」の在り方について、インクルーシブ教育講師として、東京大学小国喜弘教授に9月と12月に教員対象に研修を行い、算数科の授業研究において、研究を深めた。「ちがいをみとめあう」人権教育の実践では、日本福祉学習センターの雑賀理事が中心となり、各学年で体系的に体験的な出前授業を取り入れ、共同的な学びを進めた。平野支援学校との学年間交流や休み時間における交流(ふれあいウェンズデー)においても、「ちがいをみとめあう」人権教育の実践として、年間を通して研究を深めた。そして、自分からつくる学校づくりについては、子どもも大人もつくり手となるイエナプラン実践校である大日向小学校と常石ともに学園の2校の視察を通して、学習指導要領と令和の日本型教育との親和性が高いということを知り、個別最適な学びと協働的な学びの研究を深めた。また、公開研修会を2回行った。1つは、湘南学園の住田昌治学園長による「子どもも大人もいきいきしている学校づくり～心理的安全性の追求～」と題して、子ども達を幸せにするために、どうすれば大人が主体的に考え行動しやすい働きやすい職場をつくれるか、参加者が対話を通して当事者意識をもって考えることができた。もう1つは、ALL HEROs常任理事の徳留宏紀さんによる「非認知能力とは」～目に見えない力を育てる～と題して、長原小の目指す子どもの姿でもある「自分も人も大切にする力」「自分で考えて行動する力」「自分からチャレンジする力」など目には見えない力を、スモールステップで目標を立てて取り組んでいき、振り返ることを繰り返すことで、目には見えない力が育ち、その結果、目に見える学力が伸びるということを知った。9月の小国教授の研修では、大人が自尊心をもって働いているかをテーマに、意見を出し合い、対話して共有することで、いかに安心してコミュニケーションをとるということが大切かということ共有し、職員室にカフェスペースを作り、安心して、話しやすい雰囲気づくりに努めた。12月の小国教授の研修では、「担任と支援担当が連携し合い、障がいのある子どもたちもそうでない子どもたちも授業内容を理解し、『授業に参加している、ついていける』という実感・達成感が得られるような工夫」をテーマにグループ討議を行った。そこでは子ども達だけでできるように支援しすぎないよう見守ることが大事であることを共有した。1月の研究発表においては、子どもをできるできないで判断するのではなく、得意を伸ばして人の力を活用して生かし合える、子どもたちのことは子どもたちで決めるというような、教員が多様性を尊重し、支援しすぎず、見守る視点をもって実践することを共有した。			

5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。				
		日程	令和 5 年 1 月 27 日		参加者数	約 29 名
		場所	長原小学校多目的室			
		備考				
6	成果・課題	大阪市教育振興基本計画に示されている、 <u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u> および <u>教員の資質や指導力の向上</u> について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。				
		【見込まれる成果1】 算数科の授業実践を通して、困っている子どもへの支援について考え、問題解決に積極的に かかわり合え、友だち同士の学びの中で成長する児童の育成をめざす。				
		《検証方法》 子どもアンケート項目「問題を解く前にどうやったら問題を解くことができるかを考えるこ とができましたか」で肯定的割合を80%以上にし、「自分も人も大切にしている」や「自分で 考えて行動している」で肯定的割合を80%以上にする。				
		〔検証結果と考察〕 「問題を解く前にどうやったら問題を解くことができるかを考えることができましたか」で肯 定的割合は89%でした。「自分も人も大切にしている」は94%、「自分で考えて行動して いる」は87%とどの項目も達成できた。成果として目に見える形としてはまだできていない ところもあるので、来年度はもっと、友だち同士の学びの中で、主体的に積極的にかかわり、 成長することを促していく。				
6	成果・課題	【見込まれる成果2】 人権教育の実践研修を通して、教員自らの人権感覚を養い、「子どもから学ぶ大人」として 人権意識を向上させ、教員としての資質を高める。				
		《検証方法》 サポーターアンケート項目「教員は子どもたちが話すことをよく聞いている」や「学校は子 どもたちのために、様々な取り組みを積極的に行っている」で肯定的割合を80%以上にする。				
		〔検証結果と考察〕 「教員は子どもたちが話すことをよく聞いている」は肯定的割合が89%で、「学校は子ども 達のために、様々な取り組みを積極的に行っている」は93%だった。両方とも達成できてい た。東京大学の小国教授の研修や「ちがいをみとめあう」出前授業等を通して、「子どもから 学ぶ大人」として人権意識を向上させ、教員としての資質を高めることができた。				
		【見込まれる成果3】 子どもとともに学ぶ大人として、大人自身が「自分が学校をつくる」意識を向上させ、「笑 顔で元気に楽しく」をモットーに教員としての資質を高める。				
6	成果・課題	《検証方法》 サポーターアンケート項目「教員は子どものことをよく考え、明るくいいききと関わってい る」や「子どもたちは学校へ行くことを楽しみにしている」で肯定的割合を80%以上にする。				
		〔検証結果と考察〕 「教員は子どものことをよく考え、明るくいいききと関わっている」の肯定的割合は91%、 「子どもたちは学校へ行くことを楽しみにしている」は88%と、両方とも達成できていた。 大人自身が「自分が学校をつくる」意識を向上させ、「笑顔で元気に楽しく」をモットーに教 員としての資質を高めることについては、まだまだ個々の教員に課題があるので引き続き取り 組んでいく。				

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】 「個別最適な学び」や「協働的な学び」の研修を通して、子ども主体の学びを追求し、教員の指導力の向上を図る。</p> <p>《検証方法》 サポーターアンケート項目「教員は工夫して、わかりやすい授業をしている」で肯定的割合を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕 「教員は工夫して、わかりやすい授業をしている」の肯定的割合は93%で達成できていた。子ども主体の学びを追求し、教員の指導力の向上を図ることについてはまだまだ、取り組んでいるところなので、来年も引き続き取り組んでいく。</p> <p>【見込まれる成果5】</p> <p>《検証方法》</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>【研究全体を通した成果と課題】 具体的に記載してください。 成果としては、算数科の授業実践を通して、困っている子どもへの支援について考え、問題解決に積極的に関わり合え、主体的対話的に取り組むことができた。また、人権教育の実践研修を通して、教員自らの人権感覚を養い、「子どもから学ぶ大人」としての人権意識を向上させ、教員としての資質を高めることについては、ある一定の成果を得ることができた。課題としては、子どもとともに学ぶ大人として、大人自身が「学校をつくる」意識を向上させ、「笑顔で元気に楽しく」をモットーに教員としての資質を高めることについては、当事者意識をもって取り組むこと、笑顔で元気に楽しく取り組むことに課題がある。来年度は、研修履歴の記録と校長による資質向上に関する指導助言の仕組みが施行されるため、各教員が個人課題を設定し、学びたいことを学びたいように、自分から進んで学ぶ研究や研修を進めていく。学校教育目標に向かって「めざす子どもの姿」や「めざす大人の姿」の実現を目指して、主体的に対話的に深い学びを、個別最適に、場合によっては協働的に進めていく。</p> <p>《代表校園長の総評》 「人権教育としてのインクルーシブ教育のあり方～誰一人取り残さず、みんながいきいきするために～」と題して、東京大学の小国教授とともに、研究に取り組んできた。誰一人取り残さないという視点で、子どもをできるできないで判断するのではなく、得意を伸ばして人の力を活用して生かし合える、子どもたちのことは子どもたちで決めるというような、教員が多様性を尊重し、支援しすぎず、見守る視点をもって実践することで、教員の資質や指導力の向上につなげることができた。一方で、インクルーシブ教育は、一つの理想やゴールがあるわけではない。「どうしたらともに学び、ともに育ち、ともに生きていけるのか」という問いを絶えず繰り返しながら進む中で、教員が主体的対話的に学校づくりを当事者意識をもってともに進めていくことが重要である。</p>
---	-------	--